第5週(1月29日～2月4日) トピックス:＜感染性胃腸炎＞

京都市の感染性胃腸炎の定点当たり報告数は、7.17(前週7.33)、全国は、7.43(前週7.60)で共に第1週以降、増加しています(図1)。京都市及び全国の過去5年平均値の推移を見ると、例年11月頃から報告数が増加し、12月及び1月にピークを迎えています。昨年秋以降は、京都市、全国共に過去5年平均値より高い又は同レベルで推移しています。

京都市の過去5年間の年齢構成比の推移をみると、1歳以下で全体の20%前後を、5歳以下で全体の60%前後を占めており、未就学児の患者が多いことが分かります(図2)。今年第5週までの発生状況についても、例年と概ね同様の構成比になっています。

感染性胃腸炎は、下痢やおう吐を主症状とする感染症の総称で、感染症法において5類感染症定点把握疾患に分類されています。原因となる病原体は、ノロウイルスやロタウイルスなどのウイルスのほか、細菌やアメーバなどの寄生虫も含まれ多岐に渡ります。このうち、冬季はノロウイルスが、冬季から春先にかけてはロタウイルスが主な原因となります。

本市では本年1月に、高齢者福祉施設でノロウイルスを原因とする集団食中毒事件が発生したことや、同月中旬以降、高齢者福祉施設や保育園等で感染性胃腸炎の集団発生事例が増加していることから、今後、更に患者数が急増する恐れがあり、発生動向に注意が必要です。

ノロウイルスによる胃腸炎の主な症状はおう吐、下痢、発熱、腹痛で、小児ではおう吐、成人では下痢が多くみられ、潜伏期間は1～2日、有症期間は1～2日です。また、症状がなくなった後も1ヶ月程度は便中にウイルスを排出すると言われており、2次感染への注意が必要です。

ロタウイルスは、乳幼児の急性胃腸炎の主な原因ウイルスとして知られています。ロタウイルスに感染すると、発熱やおう吐、水のような下痢が繰り返し起こります。激しいおう吐や下痢により脱水になるなど重症化することがあり、点滴や入院が必要になることがあります。また、まれに脳炎や脳症を発症することがあるため、注意が必要です。潜伏期間は2～4日、有症期間は3～7日です。なお、ロタウイルスについては、乳児を対象とするワクチンの定期接種が行われています。

どちらも有効な特効薬はなく、対症療法となります。感染経路は主に経口感染で、汚染された糞便や吐物から人の手などを介してウイルスを経口的に摂取した場合に感染します。また、ノロウイルスに汚染されたカキなどの二枚貝や食品を生あるいは加熱不足で喫食した場合には、食中毒の原因となることもあります。

感染性胃腸炎を予防するためには、適切な手洗いと十分な加熱調理が重要です。外出後やトイレの後、調理や食事の前には石けんを使って手を洗うこと、調理の際には食材の中心温度が90℃で90秒以上加熱することが大切です。

○こどもに多い感染症について(京都市情報館)
https://www.city.kyoto.lg.jp/hokenfukushi/page/0000197526.html
(ノロウイルス・ロタウイルスを含めこどもがかかりやすい感染症の特徴や予防方法をまとめています。)

○ロタウイルス予防接種について(京都市情報館)
https://www.city.kyoto.lg.jp/hokenfukushi/page/0000273091.html
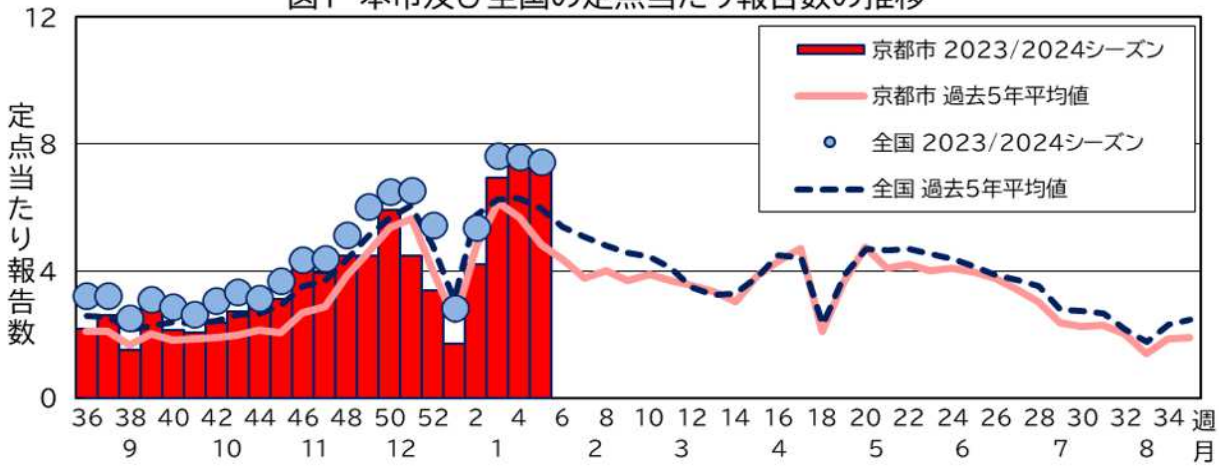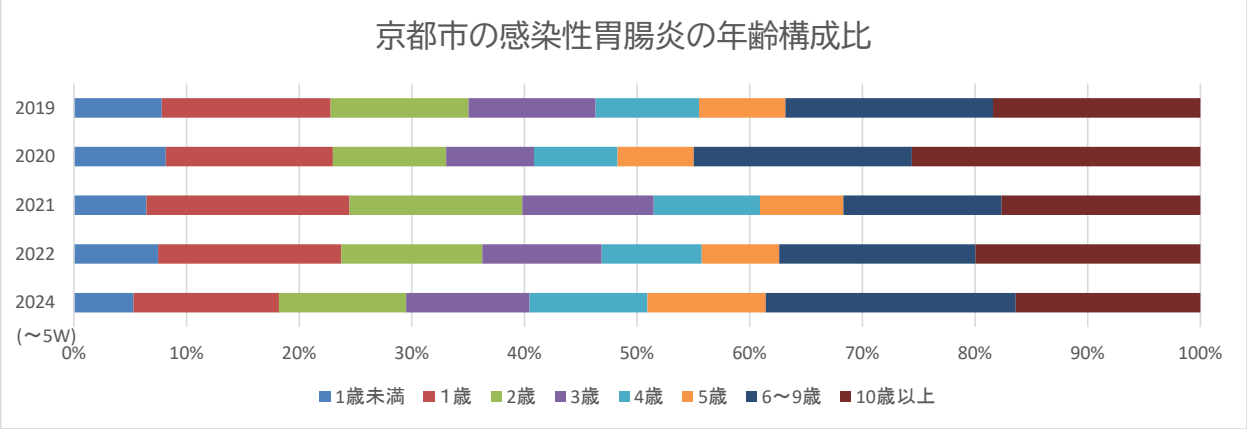
図1　本市及び全国の定点当たり報告数の推移